

内田クレペリン精神検査とYG性格検査との 関連に関する一考察

林 潔　瀧本 孝雄*　山田 耕嗣**

目的

内田クレペリン精神検査は、わが国における代表的作業検査として発展したものである。

YG性格検査は、質問紙法性格検査として多方面で応用されている。この二つの検査手法は併用されていることが多いので、ここでは、両者の関連について検討を加えることとする。

方 法

本研究では、内田クレペリン精神検査とYG性格検査を用いた。

これらの2種類の検査を、首都圏の私立短期大学1校の学生女子183人に対して実施した(1986, 1987, 1988年)。

内田クレペリン精神検査は、基本指標としての、平均作業量、P F値、および後期上回り率を扱った。また、判定結果として、3特性(発動性、可変性、亢進性)を扱った。

平均作業量は、30分全体の作業量の平均である。

P F(Profile Fluctuation)値は、一般には日本・精神技術研究所により作成されたModel-1による数値が用いられている。これは作業量に応じて期待される曲線経過(定型曲線)とのずれの程度を表現するものである。しかし、ここでは、183人の被験者集団をモデルとして、この集団での作業量に応じて期待される曲線経過とのずれを表示するものである。これは次の式で求める。

$$Pfi = \sum \{(Y_{ij} - \hat{Y}_{ij})^2 / \hat{Y}_{ij}\}$$

$$i=1, \dots, n \quad j=1, \dots, 30 \quad (1)$$

Y_{ij} : ある検査結果(個人*i*)の*j*番目の作業量
 \hat{Y}_{ij} : *j*分目の期待作業量

\hat{Y}_{ij} は次式で推定したものである。

$$\hat{Y}_{ij} = a_j + b_j X_i \quad j=1, \dots, 30 \quad (2)$$

すなわち、適当なモデル集団(データ数*n*)について、平均作業量(ここでは*X_i* *i*=1, ..., *n*)と各分の作業量(Y_{ij} *i*=1, ..., 30)との関係を一次回帰式で求めたもの

* 獨協大学教養部

** 日本・精神技術研究所

である。

従って、この数値が小さいからといって定型曲線に近いとはいえないが、この数値が大きい場合には、結果的に定型曲線とのずれを指摘して差し支えない。

後期上回り率は、前期（休憩前15分）の平均作業量に対する後期（休憩後15分）の平均作業量の増減率（%）である。

3特性は、曲線特徴を表現するものである。判定基準は日本・精神技術研究所による。

発動性は、前期・後期における初頭部の抜き出しに主として関連している。抜き出しの状態に応じて、過度、中程度、不足に分類する。

可変性は、全期を通しての曲線の部分変動に主として関連し、変動の多少状態に応じて、過度、中程度、不足とする。

亢進性は、前期・後期における後半部の曲線経過に主として関連している。後半部の曲線経過に見られる上昇・下降の状態に応じて、過度・中程度・不足と分類する。

YG性格検査は12の特性の得点を扱った。

結 果

内田クレペリン精神検査の基本指標とYG性格検査の12尺度についての、183人の結果は、Table 1-1～2のとおりである。

Table 1-1 内田クレペリン精神検査の基本指標

	M	S D
平均作業量	59.71	11.35
P F 値	10.12	7.36
後期上回り率	113.86	6.63

Table 1-2 YG性格検査の12尺度

特 性	M	S D
D. 抑うつ性	10.56	6.99
C. 回帰性傾向	11.16	5.66
I. 劣等感	10.84	5.03
N. 神経質	9.71	5.17
O. 客觀性がないこと	10.12	5.30
Co. 協調性がないこと	9.59	4.01
Ag. 愛想のないこと/攻撃性	8.27	3.93
G. 一般的活動性	11.73	3.82
R. のんきさ	10.61	4.44
T. 思考的外向	13.04	4.34
A. 支配性	9.28	4.59
S. 社会的外向	10.43	4.78

なお、183人中、発動性、可変性、亢進性の判定の過不足を特定できない者が11人あったので、これらを除外し、172人のデータで検討した。

平均作業量、PF 値、後期上回り率との関連については各指標とも 172 人のデータについて、その値の大きい方から 53 人 (31%)、小さい方から 53 人 (31%) をとりだし、その両群の差異を YG 尺度の得点で比較してみた。この結果は、Table 2~4 のとおりである。

Table 2 平均作業量 (Av) の大小と YG 尺度

	Av 大群		Av 小群		t 値
	M	S D	M	S D	
D.	10.43	6.00	11.81	5.94	1.179
C.	9.57	5.16	11.02	4.94	1.464
I.	9.08	5.09	10.62	5.22	1.523
N.	9.55	5.41	11.15	5.03	1.562
O.	9.25	4.51	10.15	3.78	1.103
Co.	8.17	4.11	8.70	4.23	.648
Ag.	11.96	3.82	11.06	3.99	1.175
G.	11.09	4.18	9.46	4.72	1.864
R.	13.34	4.00	11.47	4.64	2.201*
T.	9.92	4.62	8.36	4.79	1.690
A.	10.91	4.46	9.53	5.15	1.461
S.	14.06	4.54	11.58	5.50	2.508*

* p < .05

なお、Av 大小 2 群についての平均作業量は、次のとおりである。

	M	S D	最大値	最小値
Av 大群	73.68	5.07	84.8	66.6
Av 小群	48.16	4.93	54.6	35.0

Table 3 PF 値 (PF) の大小と YG 尺度

	PF 大群		PF 小群		t 値
	M	S D	M	S D	
D.	11.68	5.74	11.25	5.36	.395
C.	10.79	4.78	10.79	4.78	.000
I.	9.60	4.72	10.36	4.76	.816
N.	10.89	4.88	10.64	5.01	.258
O.	10.19	4.08	9.36	4.15	1.028
Co.	8.81	3.63	8.64	3.97	.228
Ag.	12.77	3.87	11.15	3.16	2.338*
G.	10.49	4.72	9.47	3.85	1.207
R.	13.68	4.38	12.45	4.34	1.438
T.	8.23	4.52	9.87	4.00	1.959
A.	10.32	5.19	9.94	3.90	.422
S.	12.83	5.05	12.26	4.59	.602

* p < .05

なお、PF 値大小 2 群についての、PF 値は次のとおりである。

	M	S D	最大値	最小値
P F 大群	12.08	2.81	22.2	8.9
P F 小群	4.58	1.79	5.5	2.9

Table 4 後期上回り率 (R) の大小と Y G 尺度

	R 大群		R 小群		t 値
	M	S D	M	S D	
D.	11.11	5.55	11.32	5.73	.190
C.	10.49	4.98	9.98	4.46	.550
I.	9.23	5.06	9.64	4.95	.418
N.	10.15	5.56	10.43	4.92	.272
O.	9.47	3.84	9.79	3.91	.421
Co.	8.04	3.84	9.15	3.75	1.491
Ag.	12.81	3.35	11.21	4.18	2.154*
G.	11.17	4.69	10.04	4.46	1.266
R.	13.26	4.51	12.15	4.31	1.283
T.	9.13	4.66	8.85	4.50	.312
A.	10.70	4.75	9.55	4.92	1.213
S.	12.72	4.81	12.55	5.28	.172

* p<.05

なお、後期上回り率大小群についての、後期上回り率は次のとおりである。

	M	S D	最大値	最小値
R 大群	121.13	2.96	127.5	118.1
R 小群	107.90	2.54	110.8	98.8

次に、内田 クレペリン精神検査の 3 特性との関連について述べることにする。各特性と

Table 5 発動性の過不足と Y G 尺度

	不足群		過度群		t 値
	M	S D	M	S D	
D.	11.05	5.44	14.18	5.72	2.056*
C.	10.28	4.71	13.88	3.39	2.876**
I.	9.33	4.90	10.88	4.14	1.169
N.	9.79	5.49	13.06	3.78	2.250*
O.	9.41	3.75	12.24	3.40	2.763**
Co.	7.94	3.92	9.24	2.58	1.258
Ag.	11.91	3.89	13.24	3.87	1.234
G.	10.96	4.35	10.12	3.85	.709
R.	12.73	4.25	14.18	4.45	1.220
T.	9.03	4.61	8.41	4.55	.486
A.	10.58	5.00	10.47	3.79	.082
S.	13.41	5.17	13.35	4.19	.043

* p<.05 ** p<.01

も、日本・精神技術研究所の判定基準により、過度群と不足群を分け、前項と同様に比較した。なお、発動性過度群は17人、発動性不足群は78人、可変性過度群は20人、可変性不足群は42人、亢進性過度群は30人、亢進性不足群は33人であった。結果は Table 5~7 に示す。

なお、発動性の過不足に対する、Av, PF, R の値は次のとおりである。

発動性の 3 程度		不足	中程度	過度
平均作業量	M	58.17	60.81	68.83
	S D	10.83	10.79	9.19
P F 値	M	7.72	7.47	9.72
	S D	2.68	3.81	5.13
後期上回り率	M	114.57	114.04	114.98
	S D	5.52	5.90	5.92

Table 6 可変性の過不足と Y G 尺度

	不足群		過度群		t 値
	M	S D	M	S D	
D.	10.79	5.78	10.45	5.20	.220
C.	10.02	4.51	11.30	4.96	.995
I.	9.74	5.12	9.05	4.94	.494
N.	10.31	4.90	10.00	4.31	.238
O.	8.86	3.86	10.35	2.55	1.545
Co.	8.93	4.06	8.65	4.57	.240
Ag.	12.07	3.92	13.20	3.87	1.048
G.	9.98	4.42	11.70	4.43	1.359
R.	12.69	4.49	14.35	3.80	1.405
T.	10.19	3.52	9.55	4.34	.609
A.	9.71	3.87	11.15	5.21	1.199
S.	11.95	4.41	13.75	4.59	1.458

なお、可変性の過不足に対する、Av, PF, R の値は次のとおりである。

可変性の 3 程度		不足	中程度	過度
平均作業量	M	61.71	60.69	56.23
	S D	11.34	11.07	9.29
P F 値	M	5.65	8.68	9.89
	S D	2.27	6.53	2.36
後期上回り率	M	115.45	113.61	116.31
	S D	5.73	5.65	5.41

Table 7 亢進性の過不足とYG尺度

	不足群		過度群		t 値
	M	S D	M	S D	
D.	11.70	5.37	10.50	5.06	.896
C.	11.44	4.37	10.67	4.53	.675
I.	10.70	5.71	10.00	3.82	.557
N.	11.45	5.45	9.67	5.04	1.320
O.	9.52	4.38	9.17	3.32	.349
Co.	8.33	3.70	7.80	3.46	.576
Ag.	12.24	4.05	12.00	3.91	.235
G.	9.52	5.00	10.83	3.80	1.143
R.	13.15	4.45	13.35	3.71	.190
T.	8.61	4.81	9.83	4.36	1.034
A.	9.91	5.10	10.03	4.18	.100
S.	12.18	4.90	13.27	4.72	.883

なお、亢進性の過不足に対する、Av, PF, R の値は次のとおりである。

亢進性の3程度	不足	中程度	過度
平均作業量	M S D	61.23 11.67	60.11 11.19
PF 値	M S D	9.18 4.48	7.40 3.34
後期上回り率	M S D	112.95 6.69	114.31 5.49
			116.33 4.92

以上の結果、平均作業量については次のとおりである。作業量の相対的に多い方が、R(のんきさ)、S(社会的外向)に高得点を示す傾向が見られた。

PF 値の相対的に大きい方が、Ag(攻撃性)に高得点を示す傾向が見られた。

後期上回り率の相対的に大きい方が、Ag(攻撃性)に高得点を示す傾向が見られた。

発動性については次のことことが明らかになった。すなわち発動性の過度の方は、D(抑うつ性)、C(回帰性傾向)、N(神経質)、O(客観性がないこと)がそれぞれ高い得点を示す傾向が見られた。

可変性、亢進性はYGの12特性との間には有意差は認められなかった。

考 察

これら女子を対象とした、172人のデータの結果によって明らかになった諸点について考察したい。

作業量の多いのは、いつも刺激を求める、社会的外向が高い人々である。いわばアクティブなタイプの人々である。比較的自信がありのびのびと行動していることがうかがわれる。平均作業量の多少との関連については、石川(1959)、小笠原(1977)が触れている。

積極性、活動性、外向性などである。その文脈から見ると、今回の集団の中での高低でのR、Sの差は、同じ方向を示しているといえよう。

P F値は、作業のコントロールと関連して理解される。P F値が大きいことは、作業コントロールに何らかの乱れがあることを示している。この大小は、いわゆる定型—非定型とを表現するものとして用いられるが、ここでは、定型基準ではなく、集団内の相対的位置づけであり、定型—非定型とは限らない。しかし、前述のようなP F値の値を見ると、P F値大群は定型をかなり崩していることは指摘できよう。定型を崩すということは、心的活動性において、ほどのよさが薄れ、独自性が強まることを意味する。今回、P F値大とAg（攻撃性）との関連から、内田クレペリン精神検査で作業コントロールに乱れるある方が、より活動的で好奇心が強く、自己主張がはっきりし、枠に収まらないような人物像が浮かび上ってくる。なお、文献における定型—非定型とYGとの関連は明確でない。

後期上回り率は、通常低い数値を、心身コンディションの不調（疲労・気力体力不足・意志の弱さなど）との関連で問題にされる。今回のデータで、YGのAgが高いこととの関連から、後期上回りが十分にあることは、心身の不調時では得られないようなバイタリティをうかがわせるものである。なお文献においては、石川（1959）が扱かっているが、関連は明確でない。

次に3特性について考えてみよう。関連が見出されたのは発動性の過不足のみで、可変性と亢進性については、その過不足とYGとの関連は現れなかった。発動性の過不足は検査結果の特徴としては、初頭部分の抜き出しの様相と関連している。すなわち、発動性過度は定型曲線に比べて初頭部が長く曲線経過の中で高い位置を占めていること、発動性不足は初頭部が曲線経過の中で低い位置にあり、いわゆる中高、尻上がりの曲線経過を示すことをいう。文献では、中高と内向的傾向や情緒不安定との関連を指摘するもの、その関連を否定するものと分かれている。今回も、初頭の低さについてはYGとの関連は現れなかつたが、初頭の抜き出し過ぎはYGとの関連が現れ興味を引く。発動性過度群の方がD、C、N、Oが高く情緒的に不安定な様相を示している。刺激に敏感で、なにかと気を回しがちで、自分に引きつけてものごとをとらえやすい、他からの影響を受けやすいといった姿が浮かんでくる。発動性過不足の意味（注を参照）を考えると、与えられた刺激に過敏に反応しての不安定とも解釈できよう。内田クレペリン精神検査において初頭の抜き出しがあることは、定型と判定する場合の要件だが、その抜き出しがあり過ぎることの意味を示唆する一例といえよう。なお、文献では、可変性過度に対応する動搖過多、亢進性過不足と対応する右上がり（尻上り）・右下がり（下降）曲線との関連を指摘しているものもあるが、今回は見いだされなかった。文献データはかなり極端な曲線経過を扱かっているのかもしれない。文献との比較で、注意しなければならないのは、文献データは、曲線型が、中高にしても動搖型にしても、明確なパターンに限定していることである。今回の3特性の過不足は、部分特徴の指摘に止まっていることである。例えば、発動性過度の場合、初頭部は長いが、動搖や後半部の上昇下降については、特に限定していない。今後の課題としては、今回は別々に扱った内田クレペリン精神検査の項目を相互に関連づけて扱い検討することであろう。

注

発動性 「気持や動作が、ものごとに応じてどのように動き始めるか」ということに関連する特性である。

なにごとも意欲が湧き、すぐ行動に表してしまう人がいるし、反対に、なにかとわざらわしがりしうと行動にうつる人もいる。新しいことにすぐ気が動き、飛びつく人もいるし、なかなか気が乗らず、とかく否定的な動きがでてしまう人もいる。疲れてしまうぐらいに気を張りめぐらす人がいるし、気くばりがみられず、全くといってよい程に自分勝手な人がいる。何か刺激がくると、すぐに反応してしまう人と、反応が遅れて出て来る人といった違いもみられる。

こうした様々な面における気持ちや動作の現れ方の基本的な違いが、この発動性という特性で把握される。

可変性 「気持や動作が、ものごとに応じてどのように変化するか」ということに関連する特性である。

外界の変化に応じて、変わり身がすばやく、とらえどころのないような人がいるし、自分の行き方を変えず、他人や周囲の状況に我関せずと押し通す人もいる。次から次へと気が移り、じっとしていられぬ人もいるし、全くといっていいくらいにムラ気のない人もいる。気分や感情の揺れ動くままを表に出す人がいるし、いつでも平然として感情を出さない人がいる。過敏なまでに感度をすましている人のいる一方、きわめて感度の鈍い人がいる。敏感と鈍感とが併存しているといった人も多い。気分や調子に浮き沈みの波が激しく現れる人もいる。

こうしたさまざまな面における気持ちや動作の表れ方の基本的な違いが、この可変性という特性で把握される。

亢進性 「ものごとに応じて、気持ちや動作のたかぶりがどのようにあらわれるか」ということに関連する特性である。

気持ちや動作の働き具合をみていくと、だんだん勢いを増し、気がたかぶっていく人と、たかぶりが弱く、むしろ、おだやかに働き続ける人がある。促進的働き方と抑制的働き方、あるいは勢いづく傾向と無理をしない傾向、亢進と減衰といった両極のバランスが重要な機能をもっていることが、いろいろな場面においてみいだされる。仕事ぶりだけではなく、人づきあいの場面においても、自分を強く打ち出し、他を服従させようという人や、自分を押え、他に逆らわないといった人の違いもしばしばみられる。心的活動の興奮と疲労といった面も、亢進性に関連があるようである。

こうした様々な面における気持ちや動作の現れ方の基本的な違いが、この亢進性という特性で把握される。

参考文献

- 石川 啓 1959 多相的集団ロールシャッハ検査の作成(5)——Y.G., クレペリン, 京大NX知能検査との因子的関連について 日本心理学会第23回大会発表論文集
- 石毛長雄 丸山康則 田中友三郎 1963 内田クレペリン作業素質検査の曲線型と personality 日本国鉄道能率管理研究所紀要
- 柏木繁男 1975 内田クレペリンにおける解析的評価法 金子書房
- 柏木繁男 園原太郎 丸山康則 1962 Y-G検査項目による内田・クレペリン検査の因子分析的研究 日本心理学会第26回大会発表論文集
- 加藤正英 香川隆子 1958 クレペリン内田作業素質検査のY-G性格検査による検討 日本応用心理学会第25回大会研究発表抄録集
- 加藤正英 香川隆子 1959 クレペリン内田作業素質検査の曲線型のY-G性格検査による検討——定型と中高型との比較 奈良女子大学文学会研究年報Ⅱ
- 日本・精神技術研究所編 1972 内田クレペリン精神検査の数量的評価法——Model 1によるP F値算出法と解説——
- 日本・精神技術研究所編 1976 内田クレペリン精神検査性格・行動特性判定の解説
- 小笠原春彦 1977 内田クレペリン検査における因子得点判定法の信頼性と妥当性 鉄道労働科学

園原太郎 柏木繁男 丸山康則 1962 Y-G検査項目による内田クレペリン検査の因子分析的研究 日本心理学会第25回大会発表論文集

須見喜六 1969 内田クレペリン作業曲線とY-G性格プロフィールの関係 日本心理学会第33回大会発表論文集352

須見喜六 1973 内田クレペリン精神作業検査の作業曲線の型とY-G検査の性格特性との関係 日本心理学会第37回大会発表論文集

Takimoto, T., Uchida, J., Yamada, K., Hayashi, K. 1988 Work curve characteristics of Junior High School students by Uchida-Kraepelin Psychodiagnostic test. 24th International Congress of Psychology.

外岡豊彦監修 1975 内田クレペリン精神検査・基礎テキスト 日本・精神技術研究所

はやし きよし (心理学)

たきもと たかお (心理学)

やまだ こうじ (心理学)